

02-025

肥満小児の食事への関心・嗜好の地域差の検討：新しい食行動評価方法を用いて

木村 真司¹、福岡 理英²、赤井 研樹^{3,4}、
遠藤 有里⁵、南前 恵子⁵、花木 啓一⁵¹島根大学 医学・看護学系医学部 臨床看護学講座²島根大学 医学・看護学系医学部 地域・老年看護学講座³島根大学 研究・学術情報機構戦略的研究推進センター⁴地域包括ケア教育研究センター⁵鳥取大学医学部保健学科母性・小児家族看護学講座

【目的】

肥満の成因として、肥満小児にも食行動の偏りがあること、また小児の体格や肥満度には地域差が見られることが指摘されている。しかし、小児では食行動の評価指標として今まで適切なものがなかった。我々は、通信機能を備えたタッチパネル上のイラスト画を小児自身に選択させる手法と、簡単な文章による「小児版：生活習慣質問紙」を開発し、これらを用いて、食事の関心・食物の嗜好など食行動の地域差を明らかにすることを目的とした。

【方法】

対象は、A県内の地域性の異なるB市部と中山間地域であるC地区で小学校に通学している6～12歳の小児632名のうち、全ての調査に回答した505名（市部293名、中山間地域212名、男子252名、女子253名）とした。イラスト選択法（食事への関心）では、小児の身近対象物36個（10種は食品、26種は食品以外）から任意の10個を選択させ、含まれる食品数を食事への関心スコアとした。イラスト選択法（食物の嗜好）では、食品36個のイラストから任意の10個を選択させ、「和食スコア」「平均エネルギー」「脂肪エネルギー比率」「飽和脂肪酸スコア」を算出して嗜好を評価した。「小児版：生活習慣質問紙」では、食行動の各領域に関連する質問17項目と、遊びや運動習慣、入眠時刻や起床時刻などの食行動以外の生活習慣13項目からなる小児用の生活習慣評価尺度を開発した。小児でも回答できるよう平易な文章を用いて簡素化し、選択式の質問のみとし、小児自身へ回答させた。

【結果】

肥満度は、市部より中山間地域で有意に高値を示した（ -2.8 ± 12.2 vs 2.9 ± 14.6 , $p < 0.05$ ）。イラスト選択法を用いた食事への関心、食物嗜好の4指標について、地域差は認められなかった。質問紙について、市部は中山間地域より、「ジュースを飲む」「家族と食事をとらない」「学校から帰って遊ばない」頻度が有意に高かった（56.3% vs 46.2%、19.8% vs 12.7%、53.9% vs 32.1%, $p < 0.05$ ）。一方、「テレビを見ながら食事をする」「運動は週半分未満」「コンビニやスーパーで買い食いする」について、市部は中山間地域より有意に頻度が低かった（45.4% vs 54.2%, 38.9% vs 53.8%, 12.6% vs 24.5%, $p < 0.05$ ）。

【考察】

イラスト選択法を用いた小児の食事への関心・食物嗜好には有意な差は見られなかったが、質問紙を用いた食行動や運動習慣など一部の生活習慣には地域差が認められた。今後、より詳細な検討が必要であることが明らかとなった。